

“障害者の権利を守り発達を保障する”

みんなのねがいをつなげるための手づくりマガジン

“しがじん”は、全国障害者問題研究会（全障研）滋賀支部のマガジンです。障害のある人に関わる色々な人のつながりをつくり広げていきたいという願いから生まれました。

しがじん

TAKE
FREE
¥0

第11号

全障研ってなに？
キーワードは発達保障



全障研では、障害者や家族のねがいを大切に、すべての人の発達を保障するための研究や調査を行っています。各地の取り組みを交流しつつ、一人ひとりが研究活動に主体的に参加しています。

出版活動

全障研出版部から月刊『みんなのねがい』と季刊『障害者問題研究』を発行しています。その他、保育や療育、教育、医療、福祉など幅広く書籍を出版しています。

支部やサークル

全国の都道府県に支部があり、それぞれの活動をしています。また会員相互に集まって、自由なサークル活動をしています。

みんなのねがいweb

ホームページでは、全障研のニュースとともに充実した資料とリンク集が。障害者政策や運動も適時アップされています。facebook もあります。

今回のメニュー

- 今回の特集は「青年期の生と性」2～5p.
- 第4回学習講座の報告6～7p.
- 第50回京都大会紙上交渉会8p.

2017年度
会員更新・新入会
受付中

2017年度総会のご案内

と き 2017年5月28日(日)13:30～16:30
と ころ コミュニティーセンター野洲 研修室2
詳細については、改めてご案内します。

全障研滋賀支部へのお問い合わせは

n_hanako@zeus.eonet.ne.jp

(事務局長 能勢ゆかり)まで

全障研滋賀支部



特集



青年期の生と性

全障研滋賀支部では、去る12月3日に、野洲のコミュニティセンターで第3回連続講座を行いました。テーマは「青年期の生と性」。保護者の立場、教える立場、共に活動する立場とそれぞれ立場の違う3名の方をお招きし、シンポジウムを開催しました。



北川博文さん（養護学校保護者）

「女性からもてるかっこいい男に」

父として大切にしていること

小さい頃はみんなから「かわいい」と言われていた我が子も、小5で声変わりをし、最近では「うるさい！」と親に向かって口答え、第二次性徴期を迎えた中学部2年生です。

父親として大切にしているのは、身体のイメージをもたせるということ。一緒にお風呂に入りながら洗う部位の名前を言ったり、ちょっと変わったスキンシップを楽しんだり…。また大雨の日に外で遊ばせたり、冬の川に入ってみたりと行動にストップをかけるのではなく、身体に伝わる感覚を大切にしています。

また、銭湯なんかにも出かけているんな人の身体を見る機会も大切にしてきました。そのせいか、思春期に入り身体が変化してきても特に混乱した様子は見られませんでした。今では一人でお風呂に入ることもできるようになっていますが、入浴時間は、父にとっても大事な時間です。

最近、思春期に突入

最近になって、女性に興味が出てきて、好きな先生もできたようです。距離感がうまくつかめず、例えば、女性の胸元について名札をじっと見たり、名前を聞きに行っちゃったりするなど親として戸惑うこともあります。しかし、人を好きになることのすばらしさは伝えたいと思っています。

次にそんな場面にでくわしたら、息子の事をちゃんと説明したいと考えています。障害がある事、女性に興味をもっていること。

様々な欲求が出ては消えながら少しずつ成長しているのかな。これからも悩まされる事が多いと思いますが、息子の心と身体に寄り添いながら成長を支え続けたいと思います。

かっこいい男に

私が障害のある子ども達の性教育に興味を持ち始めたのはある先生の「私は子ども達が性犯罪の被害者にも加害者にもなってほしくない」という言葉です。

わが子が、格好いい男に、そして女性にもモテる男になる、そんな将来像を抱きながら、明日からまた一緒にお風呂に入って一緒に考えたいと思います。

千住真理子さん (ほぽろスクエア)

「こころとからだの主人公に」



性教育に目覚めたきっかけ

長く中学校の支援学級で勤務した後、異動した支援学校で性教育を始め、一生懸命に学ぶ子どもたちの姿に触れてから性教育の虜になりました。例えば、男の子の性について。「わざわざ学ばなくても“そのうち”わかる」という意見もあるようですが、第二性徴にみられる身体の変化には、個人差があり、またプライベートゾーンでの変化が大きいために不安に思ったり、悩んでいる子どもは意外にたくさんいます。学ぶことを通して“みんな同じ”ことがわかり安心する。そのことが何よりも大切だと思っています。

現在のとりくみ

ほぽろスクエア (大阪) では、青年・成人期の人たちに向けて「こころとからだの学習」(性教育) とグッドライフ (進路) に取り組んでいます。

「男性のからだ」「女性のからだ」「からだの変化」「命の誕生」「付き合い方」「AV」「障がい理解」などをテーマとして取り組んでいます。例えば、女性の身体のこと (生理前や生理中の不快など) を知ることで、女性へのいたわりの感情が芽生えます。受精や妊婦体験を通して自分の命の尊さに気づくなど学びへの意欲がどんどん高まっていきます。

以前、産道体験 (細長い布の輪をくぐって生まれる体験) の時に途中で止まり「生まれたくない」と言い出す人がいて、その理由をひもといていくと虐待の経験にたどり着いたこともありました。しかし、励まされ「生まれて」きたときに、みんなから「おめでとう！」と拍手をもらい、改めて「生まれてきてよかった」と思えるなど、性の学習は、直接生きることへとつながっていきます。

フォークダンスや社交ダンスなどの「ふれあいの文化」では実際にお互いの身体に触れることで、相手を大切にすることが芽生えることもあります。「触ってはいけません」「近づいてはいけません」という禁止の先には何もありません。「これならいいよ」をたくさん提示して肯定的に見てあげることが大切です。

学校教育の中で・・・

障害のある子どもたちは、自分と他者を比べて『違い』を感じていることが多く、自分を好きになれない子や自己肯定感の低い子が多いように思います。そんな子は、なかなか「イヤ」が言えず、相手に合わせてしまうことがあります。性については自己決定がとても大事です。しかし、急にその力が育つわけではありません。学校教育を受けている間に、自分で決める経験をたくさん積んでほしいと考えます。

高木伸斉さん (MMK)

「仲間との絆が生きるエネルギー源に」



MMKとは？

MMKとは「もてて、もてて。こまっちゃう」の意味。知的障害のある青年達が「かっこいい男になりたい」「彼女がほしい」という願いをもちよって、支援を受けながら月に1度集まり、性やからだの学習、余暇活動などを行っています。

始まったきっかけ

すべての始まりは、Aさん(30代)の「Hな本が見たい」「彼女がほしい」「結婚したい」という願いから。「彼女」や「結婚」は、相手が必要なことなので、すぐにどうこうできる問題ではないので、対応もしやすかったのですが、「Hな本」については、簡単に見ることができます。しかし、家族の反対があり、支援者としてははぐらかさざるを得ない状況が続いていました。

Aさんの通所先で「性教育」が行われたのですが、性器の名称や生殖の仕組みがわかったところでAさんの

悩みが解消するわけではなく、Aさんのモヤモヤはそのうち、日常生活に支障をきたすようになっていきました。

現実とAさんの悩みを「生きていく上で切り離すことができない課題」と位置づけ、自分自身の経験とも重ね合わせて、「学生達が学校帰りに立ち寄るファストフード店の一角のような雰囲気」「支援者もメンバーとして参加し一緒に学ぶ」ことを基本にMMKが誕生しました。

具体的な活動

発足当初の活動場所はカラオケボックス。そこには、デリケートな話題は他者の耳に入る場所ではないという「場面の学習」の意味もありました。とにかくやりたいことを出し合い、そしてフィールドワークへ。

例えば、「女性にもてるためには清潔に」という話し合いの後は、みんなで銭湯へいくなど。学習を行う時はその道のプロを講師として招く。携帯電話のマナーは、携帯電話会社の人、食事のマナーは食育アドバイザーなど。

大切にしていること

MMKの活動時間は生活全体の中ではごくわずかです。MMKでメンバーが学んだ内容が家庭や事業所で否定されるようなことがあっては、何にもなりません。MMKの活動を報告し共有することで、家族には肩の荷をおろしてもらい、関係機関とは荷を分かち合うようにしています。

メンバーの育ち

MMKの活動を通して性に関する悩みやトラブルが目に見えて減ってきました。同時にお互いの仲間意識が高まり、絆が深まっている。それが、「生きる」エネルギーにつながっているようです。



全・体・討・論

千住真理子さん

性教育について「教えるのかどうか、いつ教えるのか」という問題があるが、本人が、どうしていいかわからず困っている姿があるときに教えてあげるタイミングではないだろうか。

できれば、18歳（学校に通っている間）までに教えてあげられるといいが…

養護学校中学部（教師）

性の問題は、どこまでがよくてどこまでがダメなのか線が引きにくいから難しい。ベストの方法を探すのはできなくてもベターな方法を教えるのが大切ではないだろうか。

女の子に興味を持ち始めた男の子が、女子更衣室を覗いてしまったことがあった。視覚化することが大切と考え、教師が更衣室を覗くシーンを動画にして見せた。本人は「あかんこと」と答え、その後、更衣室前で葛藤するようになった。

養護学校小学部（教師）

性の問題は難しいという先入観があって、知識偏重になりがち。自身は小学部にいるので、大切な存在であることを伝えるために、ハグなどのスキンシップを大切にしている。

養護学校高等部（保護者）

小学部5年生の頃から性への芽生えがあり、女の子の身体をみるようになった。中学部になったことをきっかけに母とはお風呂に入らなくなった。

思春期は「お父さんの出番」とか「プライベート空間が必要」とか言われるが、母子家庭で狭いアパート暮らしの中では限界がある。それぞれの環境に応じたやり方があっていい。

グループホーム（指導者）

Hな本を注文してGHに届けてもらい、見ている人もいるが、地域の学校から来た人と養護学校卒業生では反応が全然違う。養護学校卒業生は、嫌悪感をもつ人が多い。

成人期（当事者）

肢体障害者の恋愛では、両性共に肢体障害、男性が肢体障害、女性が肢体障害等によって必要な支援が違ってくるので「これが必要」と決めることはできない。

養護学校の卒業生が、Hな本に対して嫌悪感をもつことについて、地域の学校に通う子は、障害者同士、障害者と健常者などいろんな恋愛を経験するが、養護学校では、障害のある子どもたちばかりなので、経験不足や人間関係の広がりにくさなどもあるのではないだろうか。

作業所（指導者）

作業所の仲間と旅行に行ったときなど、経験の一つとしてアダルトビデオを観ようと誘うこともあるが、やはり養護学校経験者は否定的。それ以外にも特に恋愛など性的なこと全般について否定的だったり、消極的だったりする。もっと学校で教えておいてほしいと思うことが多い。

ま・と・め

高木伸齊さん

MMKの目的は多様な価値観があることをしてほしいということ。

参加希望者もいるが、6~7人が適当だと考えているし、経験の中で作り上げてきた仲間関係が大切。なので、必要な子がいたら、新しいサークルを作してほしいと思っている。

北川博文さん

20歳になったから、中学部になったからという考え方はおかしい。中2の息子は、高1の姉と一緒に布団に寝ている。それでもいいと思っている。一人ひとり違っていいと思う。

千住真理子さん

学校時代にどんどん正しい性教育をしてほしい。例えば、わかりやすいように「腕一本分以上は近づいてはいけません」と教えることもあるが、それではエレベーターや満員電車に乗れなくなってしまう。触れることで学ぶことがたくさんある。どこまで教えるかを悩むのではなく、全部教えてほしい。青年、成人期の人たちと学習していて「学校で教えてほしかった」という声をよく聞く。



感・想・文

- 「学校で学びたい」ということは、当事者の方や支援者の方々（保護者さん、福祉の方）の思いや願いとして本当に重要（課題）ですね。責任を感じました…。
- 『性』 = 『生』（同じようにとらえる）を学ぶ学習が性教育。とても深いなあと思いました。
- いろいろな方の意見や感想を聞いて良かったです。明日から実践していきたいです。ありがとうございました。
- べき論ではなく、目の前の人のようにすから、必要なとき、必要な支援ができるようにと思いました。非常に考えることの多い学習会でした。
- 今回の「青年期の性と生」は、今関わる生徒たちにも身近なテーマであったので、勉強になりました。

2016年度連続講座

共に生きよう、堂々と生きよう

講師 久保 厚子さん

去る2月19日（日）南草津駅前のフェリエ南草津で第4回連続講座を開催しました。

報告の前半は、旧知の黒田恵美子さんから久保さんについての紹介、後半は講座の報告です。



久保さんは“普通”のお母ちゃん!?

全国手をつなぐ育成会会長の久保さんを講師に迎えるにあたり、当初のテーマは「保護者に学ぶ」でした。

私と久保さんとの出会いは 1977 年開所時の『やまびこ教室』第一期生の保護者と療育に携わる者としてでした。

やまびこ卒業後は、ダウン症児親の会の“ひまわり会”を結成し、私の家や会員宅で持ち回りの集まりをもち（もちろん久保さん宅でも）ひたすら語り合うという会でした。しかし、後に健康センター、発達相談員の岡山先生に指導してもらい学びの場もでき、大津市障害者福祉センターにて月に一度の定例会を開催するようになり、わが滋賀支部の白石支部長が学生時代参加してくれておりました。

私の知る久保厚子さんは、この頃までは特別に率先して発言したり、行動力のある方ではありませんでした。それが『大津市障害児父母の会』（現在は『大津市障害児者を支える人の会』）会長を経験し、現在は、全国手をつなぐ育成会会長として全国を駆け回っています。昨年の世界大会（アメリカ）に出席し、今年はフランス、来年はスウェーデンの世界大会にも参加とか。久保さんは常々「私は普通のお母ちゃんです」と各方面で言っているようで、普通のお母ちゃんだけど、自分自身何故こうなったか知らない。いつの間にかこうなっていたと。

講座が終了し、参加していた保護者の方々が久保さんに駆け寄り、語りかけたとき、久保さんはそれを受け止め「そうなのよ」と相づちを打つ。大きな組織の上に立つ人物はこうでなければならないのだ。全国手をつなぐ育成会会長名で出した“障害のあるみなさんへ”「障害のある人もない人も一人ひとりが大切な存在です。安心して堂々と生きてください」等のメッセージは、私たち一人ひとりの心に響き、感動を与えてくれました。そして今回の講座は感動いっぱいの講座だったと思います。参加者の感想文がそう伝えてくれております。（黒田恵美子）

私たちに課せられた3つの課題

久保さんには、この事件の特徴と容疑者の背景、インターネットに書き込まれたさまざまな意見とそこからうかがわれる現代社会の問題、そして、本事件から何を学び、テーマにある願いをどのように実現することができるのか、また、久保さん自身のこれまでの歩み、例えば、重度の知的障害のあるご長男への親としての思い、家族との関わり等を含め、会長と保護者の2つの立場から話をしてい

いただきました。保護者の方も参加しており、久保さんの、子育てや世間一般等の個人的な体験と意見を混じえての話しに共感を持たれたのではないかと思います。

ここでは、久保さんが講演で指摘し、新聞等であまり論評されていない問題をあげ、私たちの今後の課題としたいと考えます。

1つは、犠牲者が匿名で報道されたことです。これまでは、障害の有無にかかわらず名前を公表されてきました。しかし、今回は、警察の対応とその後の扱いは、障害のある人は「可哀そうな人」、入所施設を利用していることは「不名誉なこと」等の偏見があったのではないかと、と久保さんは指摘し、これでは、殺傷された人は存在しないこと（二度死んだことになる）と話されました。そして、親自身も乗り超えていく必要があるとしました。私たちの意識にも潜んでないか、向き合うことが大切と思います。

2つは、安全で安心な施設とは、その基本についてどのように考えるかです。安全・安心に重きを置きすぎると更にクローズドな存在になり、その地域に居ない存在になってしまいます。子どもを施設に預けたとしても、その地域の住民として生きていく努力を施設はおこなっていくべきであると強調されました。職員・保護者は利用者の代弁者になりますが、生活を豊かにし、自己実現を保障する取組みの基本としておさえておきたい指摘だと思います。

3つは、「共生社会」を考える際の原点です。久保さんは、自分の体験も踏まえ、どんなに障害が重くても人間関係をもっていることがこの子らしさを育てていくこと、また、個性あるこの子の生きる姿の中に共感と共鳴を持てる社会こそが、「共生社会」であると指摘されました。糸賀一雄氏の「この子らを世の光に」に照らし合わせれば、重度の障害のある人の生活がそこにあることにより、親や支援者、社会が開眼させられ、障害福祉の思想を生産するという、発達保障の思想につながります。

以上、久保さんの静かな語りの中にある鋭さと寛容さから、参加者は多くのことを学ばせてもらったと確信します。（黒田吉孝）

感想

子どもたちといっしょに毎日過ごし、歩いていくことの「いっしょ」の意味の深さと大切さをもう一度、考え、再確認することができました。

明日からも、今日考えた「いっしょ」を子どもたちといっしょに実現していきたいと思います。また卒業した方たちとも「いっしょ」を実現していきたいと思います。お話が聞けて、本当によかったです。（教員）

久保さんのお話、いろんな感情がこみ上げて涙が止まりませんでした。「人としてあたり前の生活をさせてあげたい。」保護者として常に思っています。

社会に対しても、子どもと共に堂々と生きていきたいと思っている反面、ごくごく近い地域（町内）においては、子どもと一緒に行事に参加できなかったり、「周りの目」「ご近所の目」というものを気にしながら暮らしている自分がいます。

「共生社会」、こんな社会を実現させるには、障害のある人を理解してもらわないといけない。その為にできることをやっていきたいと思いました。（保護者）

人と人の多様性を認めあえる社会づくり、障害のある人は社会的に役に立っているのか？ということについて、得ることが多いお話でした。明日職場で、同僚と話をしようと思います。（障害者支援事業所生活介護支援員）



わたしたち全障研大会(京都)に レポートをもって参加しました



第23分科会に参加 就労施設等での実践

昨年京都の夏はいつもにまして暑かった。全障研京都大会の会場である北山宝ヶ池の国際会議場はどことなく静かだが会場内に入ると活気に満ちていた。

私は「就労施設への支援」の分科会に参加。50人近い参加者だった。6つのレポートが報告され、私は司会者(兼レポート報告)をした。他のいくつかの報告は「高工賃を目指す」課題や「地域に根ざした仕事の開拓」といった内容が多かった。

私の報告した社会就労センターこだまのレポートは、こだまのAさんのこと。

彼は高齢化に伴い、自分のできることのスPEED、達成感を感じにくくなっていった。しかし昨年度の体験ホーム(※法人内で将来グループホームに入るために一週間程度の体験を企画、ただし夜間はキーパーなし)の取り組み前後から「掃除機ができるようになりたい」「トイレ掃除の練習をしたいから」と自らメンテナンス班のなかで新たに挑戦する気持ちが芽生え始めた。「人は何歳になっても自ら発達、変化すること」「仲間の中で失敗したりするかもしれないけれどやってみようとする心」実は賃金問題だけでは解消できない課題をもっていることが明らかになった。

(こだまは作業班同士の間で給料体系の差がない。あくまでも出勤率で給与が払われている)「その人らしい生き方、働き方をどのように形作るか(=ディセントワーク)」について、今後より深めたいと感じながら帰路についた。
(社会就労センターこだま 栗本葉子)

ごあんない

2017「滋賀障害者・家族・関係者9条を守り、25条を発展させる会」

学習会

「今こそ 憲法が輝く瞬間(とき)」(仮題)

講師:大江智子さん(弁護士)



プロフィール

京都府生まれ。北九州市立大学法学部(夜間)から神戸大学法学部編入後、同志社大学法科大学院修了。学生時代に洋菓子店に勤務した経験をいかして、相談者とともに考えることをモットーに、労働問題などに取り組む。自身も障害を抱え、障害者の権利擁護に取り組む。

資料代: 500円

日時: 2017年5月14日(日)13:30~16:00(受付:13:00~)

場所: 草津市立市民交流プラザ(JR南草津駅下車 徒歩1分)

主催: 「滋賀障害者・家族・関係者9条を守り、25条を発展させる会」

連絡先: 090-1918-8120(坂口) E-mail sakamasa7192@zeus.eonet.ne.jp

全障研滋賀支部総会
と き 2017年5月28日(日)13:30~16:30
と ころ 「ディセントワーク」野洲(R野洲駅前)
詳細については改めてご案内させていただきます